

5 一人暮らし高齢者調査

本調査は、いわゆる雪だるま方式で、紹介者から紹介者を通して行ったものである。したがって、本地域の一人暮らし高齢者を代表するものとしてその結果を読み取るべき調査ではない。また、当初意図した、衰退した温泉地に特有といわれる、旅館に住み込み仲居等で働いていた、経済的に厳しい状況にある一人暮らし高齢者の生活史やニーズを明らかにするものともならなかった。調査の過程で、そのような層にアプローチすることの困難性が明らかとなったためである。衰退した温泉地である対象地域の高齢者は、サラリーマン世帯だったような中間層は少なく、旅館や商店や借家等を経営していた持家の比較的裕福な層と、旅館等で働いていたアパートや貸し間等に住む経済的に厳しい状況にある層(被保護世帯もある)に二極化している印象があるが、今回の調査対象の多くは前者となっている(持家 74.1%)。以下の調査結果を見る上ではその点に留意する必要がある。

(1) 単純集計から読みとれる傾向

・住環境

被調査者 27 名¹の平均居住年数は、34.3 年と比較的長くなっている(最小値 1、最大値 76、標準偏差 21.5)。その住居形態としては、「持家」20(74.1%)が最も多く、それに「民間の借家」3(11.1%)、「借間」3(11.1%)が続いている。また、住居に関して困っている事柄としては、「老朽化している」5(18.5%)が最も多く、それに「住宅や庭などの維持や管理が大変」2(7.4%)が続いている(「困っていることはない」という回答は 17(63.0%)である)。

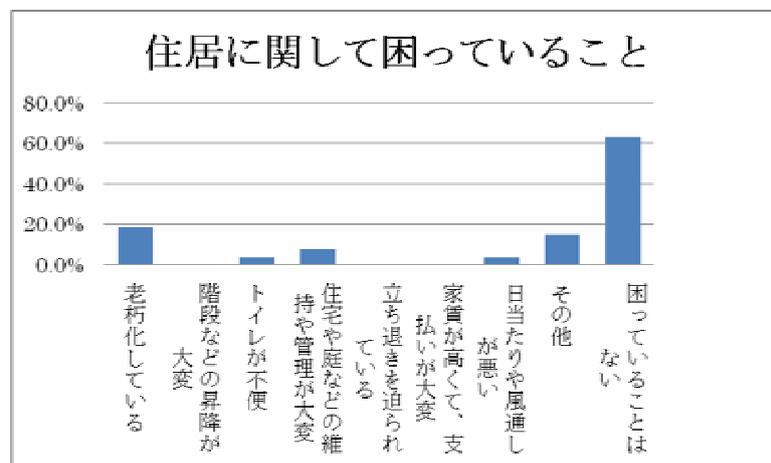


図 X-1 住居に関して困っていること

風呂については、「公衆浴場を使っている」が 16(59.3%)と最も多く(公衆浴場としては、「浜脇温泉」が 12(44.4%)と最も多く挙げられている)、それに「家の風呂を使っている」10(37.0%)が続き、「建物や敷地内の共同温泉を使っている」も 3(11.1%)見

¹ 被調査者のプロフィールは次の通りである 性別; 男性 1(3.8%)・女性 26(96.2%)、年齢; 平均 78.3 歳(最小値 65、最大値 90、標準偏差 6.3)。

られる。持家層でも公衆浴場に行っている人がいること、毎日のように公衆浴場に行っている人がいること等が、市営温泉・共同湯が点在する浜脇・松原地区ならではの特徴であろう。なお、その公衆浴場の不便な点としては、「マナーが守られない」3(11.1%)が最も多く、それに「段差が多い」2(7.4%)が続いている(「特になし」は9(33.3%)である)。

そして、居住継続意向については、生まれが別府であるか否かを問わず、「出来るだけ今の家に住み続けたい」21(91.3%)が非常に大きな割合を占めていることを指摘できる。

・健康状態

被調査者の健康状態は、「まあ健康である」16(59.3%)が最も多く、それに「あまり健康でない」8(29.6%)、「非常に健康である」3(11.1%)が続いている。このような「健康である」という回答の背景として、「毎月28日には、自治会長・老人会長・民生委員・病院看護師が独居老人宅を訪問し、血圧測定をしている」(調査票 7)といった、地域レベルにおける高齢者福祉の積極姿勢を指摘できるだろう。

・食生活

普段の食事の支度は、「自分で作っている」26(96.3%)が最も多く、それに「弁当や惣菜を買ってきている」6(22.2%)、「市の配食サービスを利用している」4(14.8%)が続いている。食事の困り事としては、「食事を作るのが面倒」7(25.9%)が最も多く、それに「買い物が大変」2(7.4%)が続いている(「困っていることはない」は19(70.4%)である)。

・外出

被調査者の外出頻度は、「毎日」11(40.7%)が最も多く、それに「週に3~4日程度」7(25.9%)、「週に5~6日程度」4(14.8%)が続いている。その一方では、「ほとんど外出しない」も2(7.4%)見られる。外出時の不便な点に関して、(1)買い物は「店が遠い」3(11.1%)、「荷物を持って帰るのが大変」2(7.4%)、(2)交通機関は「バスや電車が乗りにくい」1(3.7%)、(3)道路は「車の通りが多い」1(3.7%)が、それぞれ挙げられている。買い物に関しては、「足腰が弱くなった高齢者には、近くにお店があることが必須条件」「毎日の食料の買い出しに、なんでも揃っている高齢者向け(コンビニではないこと)のお店」(調査票 2)に対するニーズも寄せられている。

日常生活動作に関して、(1)階段の昇降は「まったく何の助けもかりずにできる」16(66.7%)が最も多く、それに「すこし難しい」4(16.7%)が続き、(2)浜脇マルシヨク(距離500m)への徒歩は「まったく何の助けもかりずにできる」15(62.5%)が最も多く、それに「すこし難しい」4(16.7%)が続き、(3)ゆめタウン/流川マルシヨク(距離1km)への徒歩は「まったく何の助けもかりずにできる」12(52.2%)が最も多く、それに「すこし難しい」6(26.1%)が続き、(4)トキ八(距離1.5km)への徒歩は「まったく何の助けもかりずにできる」11(45.8%)が最も多く、それに「すこし難しい」6(25.0%)、「とても難しい」5(20.8%)が続いている。このように、徒歩距離が長くなるにつれて、困難を感じる人が多くなる傾向が認められる。

・近所付き合い

被調査者のおしゃべり、相談相手の有無は、「そういった人がいる」22(84.6%)、「そういった人はいない」4(15.4%)という割合であり、比較的多くの人が日常的な社会関係を取り結んでいることが分かる。また、「老人会では、いろんなタイプの人があり、ケンカをしたり、悪口を言う人がいる」(調査票 4)「人が集まると、人のことをとやかくしゃべったり悪口を言ったりする人がいるので、それがきらい」(調査票 18)といった声から、ややもすれば濃すぎて縛れる地域の人間関係の緩衝役となれる場や人の必要性が窺われる。

おしゃべり、相談するための場所の不便な点としては、「公民館などが使いづらい」3(11.1%)が最も多く、それに「近くに喫茶店などが無い」2(7.4%)が続いている。前者の具体的理由として、「老人会などの行事のときは公民館の2階で行うので、自分は階段の昇降が難しいのでいけなくて残念だ」(調査票 18)といった声が寄せられている。

・暮らし向き

被調査者の暮らし向きは、「かなり楽なほうである」13(52.0%)が最も多く、それに「一応、標準的な暮らしが維持できる程度である」6(24.0%)、「苦しいが、なんとかやっていける程度である」4(16.0%)が続いている。

今の楽しみとしては、「気のおけない友人とおしゃべりすること」11(40.7%)が最も多く、それに「温泉に入ること」7(25.9%)、「おいしいものを食べること」5(18.5%)、「スポーツやレクリエーション」5(18.5%)、「旅行に行くこと」4(14.8%)、「学習や教養を高めること」4(14.8%)が続いている。気のおけない友人とおしゃべりの場所として、市営温泉・共同湯、地元の診療所・病院などが機能していることも推察される(調査票 3など)。

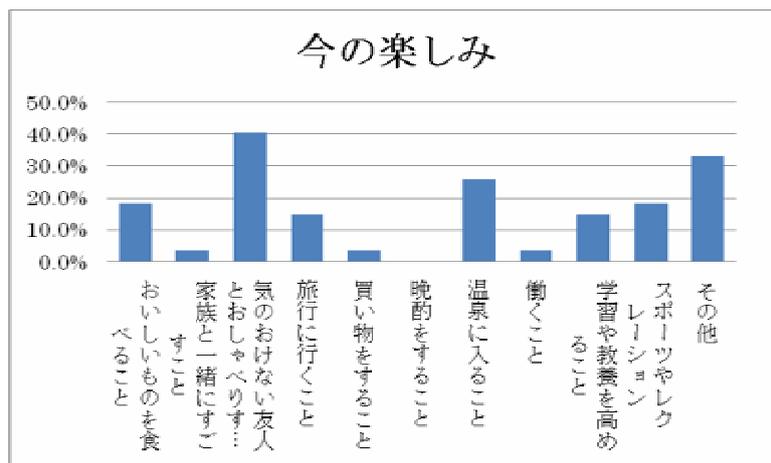


図 X-2 今の楽しみ

(2) 生活史から読みとれる傾向

次に、当初意図していた調査対象に近い者について、その生活史をみてみたい。

・86歳女性の場合

幼少期・娘時代は近隣の県で過ごす

24歳の時、近隣の県より家出して別府市内他地域に来る（別府には叔母と甥がいた）別府に来てからの仕事は、ホステスや仲居をして、旅館やホテルを転々とした住所も、市内をいろいろと変わった

36歳頃、叔母さんと市内に家を借りて、旅館経営をした（10年）

46歳の時、現在地に貸席だった古い家を買って、アパートにした。借金をしての購入であったので、その後も仲居として働き続け、借金の返済を終えた

家出をキッカケとして来別し、ホステスや仲居として働くようになった経歴は、かつての温泉地らしい生活史であろう。しかし、この女性の場合の「生活の転機」は、46歳時点での古民家購入にあったといえる。借金返済のために仲居として働き続けることにはなるが、このアパート経営こそが「現在の暮らし向きは『かなり楽』」という回答に繋がっている。また、「食事は自分で作る事は少なく、友人や近隣の方が持ってきてくれる事の方が多い」というように、良い近所付き合いがされていることが推察される。

・72歳男性の場合

（幼少期）近隣の県で暮らす

（20歳頃）電気工事の仕事をする

（50歳頃）20年程前に別府に移る。電気工事の仕事をする

（現在の暮らし向きは「苦しいが、なんとかやっていける程度である」）

以上の（職業）経歴に見られるように、50歳代に入ってから地域移動は、必ずしも階層移動を伴ったものではなかった。そのことが、「現在の暮らし向きは『苦しい』」という回答に繋がっていると考えられる。また、この男性は健康問題を抱えている様子であるが、同年代の男性との近所付き合いがセーフティ・ネットとなっていると考えられる。現在は自宅が交流の場であるが、「お茶のできる場所」が欲しいという声が寄せられていることから、高齢男性に対しても開かれた交流の場を自宅以外に設けることが課題化する。

・72歳女性の場合

3歳 他県へ（家庭が複雑で里子に出された）

15歳 別府へ（実の親元へ帰る）

22歳 結婚

この間、いろいろな仕事をしたとのこと

40代半ば 他県へ（別府は仕事がないので他県に行ったとのこと）病院で付き添いの仕事

69歳 別府市他地域へ 病院で介護補助の仕事

71歳 病気のため仕事をやめる。夫と別居し浜脇へ

72歳 週2～3回夜仕事

（現在の暮らし向きは「苦しいが、なんとかやっていける程度である」）

この女性は、自らが生まれた家族が複雑であるだけでなく、病気のため夫と別居していることに見られるように、家族（＝定位家族／生殖家族の2つ）を通じたサポートが十分ではない。また、「この地域にはまだ慣れていないし、交流もないので行こうとは思わない」との発言に見られるように、良好な地域関係が築かれているわけでもない。しかし、「おすそ分けをいただいたり、おかずを作って持って行ったり」する友人が、地域外にいるようである（そのため、地域外への転居を検討中）。彼女のような人をコミュニティに包摂するためには、自治委員・民生委員のような媒介者とともに、誰もが立ち寄れる交流の場のような媒介物が必要になるだろう。

まとめ

本調査は、冒頭で述べた通り、当初の意図に沿った対象者を確保できなかったというものの、その中でも明らかな課題が浮かび上がる。「老人会では、いろんなタイプの人があり、ケンカをしたり、悪口を言う人がいる」、「人が集まると、人のことをとやかくしゃべったり悪口を言ったりする人がいるので、それが嫌い」といった声に代表されるように、ややもすれば濃すぎて纏れる地域の間人関係の緩衝役となる一方で、疎外されている人をうまく引き入れるような役割を担う場と人である。これは、現在うまく地域に包摂されておらず調査対象にできなかったような層には、なお一層必要とされている役割と考えられる。

公共温泉が持ち家層も日常的に利用する公共の場となっており、おしゃべりをする場として公共温泉を挙げている人もいることから、公共温泉に隣接してこのような場を設けることが望まれる。おそらくその観点からほとんどの公共温泉の2階に公民館が設けられているが、階段を昇らなければならないため、身体が弱ってくると参加できない高齢者も多い。エレベータの設置は費用的にも建物構造的にも困難が予想され、むしろ公共温泉近くの別の建物の1階に場を見つける方が現実的であろう。

また、そのような場で参加者と活動内容の調整を担うファシリテーター、インタプリターは、地域をよく知りつつも、地域の高齢者から一定の距離をもてる人の方が望ましいと考えられる。